2023 年 11 月 28 日

報道資料

「広島原爆の視覚的資料―１９４５年の写真と映像」
ユネスコ「世界の記憶」（国際登録）への推薦決定について

日本政府が本日、世界史上の重要な記録物を国際登録する国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）の「世界の記憶」に、原爆投下後の広島で 1945 年内に撮られた写真 1532 点と動画 2 点からなる「広島原爆の視覚的資料―１９４５年の写真と映像」を推薦することを決めました。

本資料は、広島市、中国新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社、中国放送、日本放送協会の 6 者が共同申請者となります。6 者はそれぞれ、対象の写真、動画の保存や活用に携わってきました。日本政府によるユネスコへの推薦を経て「世界の記憶」への国際登録が実現することにより、本資料が世界中に認知され、核兵器使用の惨禍を繰り返さないという人類共通の課題への取り組みに資することを期待しています。

本資料の申請にあたっては、ご健在の写真撮影者や、ネガなどの資料を受け継がれているご遺族のほか、1945 年撮影の写真を所蔵する共同通信社、広島大学原爆放射線医科学研究所、動画資料の保存活用に関わってきた日映映像と国立映画アーカイブなどからもご賛同、ご協力をいただいております。

登録の可否は、被爆から 80 年を迎える 2025 年のユネスコ執行委員会で決まる見通しです。

【資料の概要】

申請者：広島市、株式会社中国新聞社（事務局）、株式会社朝日新聞社、株式会社毎日新聞社、株式会社中国放送、日本放送協会

資料の名称：広島原爆の視覚的資料―１９４５年の写真と映像

申請点数：写真 1532 点（27 人と 1 団体が撮影）と動画 2 点（1 団体が撮影）

資料の形式：写真のネガフィルム、プリント、ガラス乾板、動画のポジフィルム

撮影期間：1945 年 8 月 6 日から 1945 年 12 月末まで

【日本政府のユネスコへの推薦決定を受けた共同申請者のコメント】

広島への原爆投下によって何が起きたのかを克明に記録したのが、本資料の写真や動画です。被爆者の高齢化が進む中、戦争と核兵器使用の末に人間にもたらされた惨禍を今に伝える一次資料として役割が増しています。本資料が、世界中に認知され、過ちを決して繰り返さないための各国政府や市民の取り組みに資することを期待しています。

日本政府の推薦決定により、ユネスコの「世界の記憶」へ一歩前進しました。私たち自身、本資料の重要性をあらためてかみしめ、引き続き、広島平和記念資料館での展示や報道各社のウェブサイトを通じた写真と動画の発信、資料の適切な保存に取り組みます。

■申請の経緯

本資料は当初、2025 年の「世界の記憶」国際登録に向けた国内募集（2023 年 8 月 28 日締め切り）に合わせ、広島市、中国新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社の 4 者が写真 1532 点からなる「広島原爆記録写真―『きのこ雲』の下から」として、所管の文部科学省に申請しました。その後、審査の過程において審査委員会からの意見も踏まえ、映像を追加して申請することになりました。原爆記録動画２点について、関係する中国放送、日本放送協会が趣旨に賛同して共同申請者に加わり、全体の資料の名称も変更しました。結果として、原爆の視覚的資料群として完全性が増し、発信力が高まったと考えています。

申請には、広島県原爆被害者団体協議会（箕牧智之理事長）、広島県原爆被害者団体協議会（佐久間邦彦理事長）、韓国原爆被害者対策特別委員会、広島県朝鮮人被爆者協議会、広島県労働組合会議・被爆者団体連絡協議会、広島被爆者団体連絡会議の代表者から支持をいただいています。長崎関係では、長崎原爆遺族会、長崎県被爆者手帳友の会、長崎県原爆被災者協議会の各代表者、日本原水爆被害者団体協議会の田中熙巳代表委員（長崎被爆）が賛同しています。

■資料の詳細

「広島原爆の視覚的資料―1945 年の写真と映像」は、原爆が投下された 1945 年 8 月 6 日から 1945 年 12 月末までの間に日本の 27 人と 1 団体が撮影した写真 1532 点と、1 団体が撮影した動画 2 点で構成されています。廃虚と化した街、大やけどを負った被爆者、放射線の人体への影響をはじめ核兵器使用の多岐にわたる影響が記録され、広島平和記念資料館の展示に数多く活用されています。

※主な写真と、動画の主なシーンの画像を別紙に添付しています。報道用素材としての写真・動画提供については、別紙の末尾をご覧ください。

＜写真の詳細＞

写真 1532 点は、計 27 人と 1 団体によって撮られた以下の資料から構成されています。

◆「広島原爆被災撮影者の会」関連の写真資料（218 点、撮影者：13 人と 1 団体）

広島県や隣県に住む原爆記録写真の撮影者たちが 1978 年に結成した「広島原爆被災撮影者の会」の参加者たちが残した資料です。爆心地から最も至近距離で撮られたきのこ雲（深田敏夫氏撮影＝別紙①）、被爆翌日の市中心街（岸田貢宜氏撮影＝別紙⑤）や大やけどの負傷者（尾糠政美氏撮影＝別紙⑥）が含まれ、自らも被爆した市民たちがいち早く撮った写真が多く含まれるのが特徴です。

◆新聞・通信社 4 社の写真資料（268 点、撮影者 12 人）

中国新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社、同盟通信社の記者とカメラマンが撮影した写真です。被爆当日の市民の惨状（中国新聞社の松重美人氏撮影＝別紙③④）、やけどの手当てを受ける少年（朝日新聞社の宮武甫氏撮影＝別紙⑧）、顔に傷を負った少女（毎日新聞社の国平幸男氏撮影＝別紙⑪）、市中心部の廃虚（同盟通信社の佐伯敬氏撮影＝別紙⑭）などは、広島平和記念資料館の本館に常設展示されている代表的な原爆記録写真です。中国、朝日、毎日の 3 者の写真はそれぞれの新聞社が所有。同盟通信社の写真は後身の共同通信社と広島大学原爆放射線医科学研究所で所蔵されています。

◆学術調査に同行したカメラマンの写真資料（1046 点、撮影者 2 人）

東京のカメラマンだった菊池俊吉氏と林重男氏の 2 人が 10 月、文部省が日本学術研究会議に設置した「原子爆弾災害調査研究特別委員会」の広島の調査に同行して撮影した写真です。菊池氏は市内の病院や救護所でさまざまな被爆者を撮影し、原爆放射線の急性障害に苦しむ親子も写真に収めています（別紙⑲）。林氏は、爆心地付近の広大な焼け跡をパノラマ写真で記録しました（別紙㉑）。

＜動画の詳細＞

動画は戦時中にニュース映画製作を一手に担っていた社団法人日本映画社が撮影した以下 2 点です。

◆「日本ニュース第 257 号　原子爆弾　広島市の惨害」（2 分 50 秒）

日本で現存が確認されている原爆投下から最も早い時期に撮られたニュース映像です。廃虚と化した広島市中心部（別紙㉒）や広島城周辺の被害状況を収めています。1945 年 9 月 3 日に昭和天皇に派遣されて広島市内を視察した永積寅彦侍従の姿が写っており、1945 年 9 月 22 日に公開されました。日本放送協会がニュースフィルムを所蔵しています。

◆学術調査に伴う記録動画フィルム（110 分）

1945 年 9 月下旬から 10 月にかけ、「原子爆弾災害調査研究特別委員会」に補助機関として同行して撮影した動画フィルムです。爆心地付近を含む広島市内の被害状況を収め、病院や救護所では、やけどの治療を受ける女性や、原爆放射線の急性障害で髪が抜け落ちた子ども（別紙㉓）を収めています。本資料のフィルムは、日本映画社が戦後に名称変更した日本映画新社、さらに日映映像に受け継がれ、協力関係を築いた中国放送がフィルムの保存に協力するとともに動画に写る人たちの取材や番組制作を続けてきました。2013 年に国立映画アーカイブに寄贈され、同アーカイブ相模原分館で保存されています。

【「世界の記憶」について】

「世界の記憶」はユネスコが 1992 年、世界的に重要な記録物への認識を高め、保存やアクセスを促進することを目的として始めた事業の総称。その事業の代表として、人類史において特に重要な記録物を国際的に登録する制度を 1995 年に設けました。

登録審査は 2 年に 1 回で、1 カ国からの申請は、国内審査により推薦案件として選ばれた「2 件以内」とされています。次回は 2025 年春ごろ、登録案件が決まります。

※詳しくは文部科学省のウェブサイト「世界の記憶」をご参照ください。

【本件に関するお問い合わせ先】

株式会社中国新聞社（事務局）　担当：　編集局次長・木ノ元陽子　peacemedia@chugoku-np.co.jp
金崎由美　℡０８０－２９３３－７２６８